

ブルガリア（2025年度）

- [国・地域別情報トップページへ](#)
- [各国・地域情勢](#)
- [在ブルガリア日本国大使館](#)

1. 2024年度日本語教育機関調査結果
2. 日本語教育の実施状況
3. 教育制度と外国語教育
4. 学習環境
5. 教師
6. 教師会
7. 日本語教師派遣情報
8. シラバス・ガイドライン
9. 評価・試験
10. 日本語教育略史

1.2024年度日本語教育機関調査結果

初等教育			中等教育			高等教育			学校教育以外			全体の合計		
機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数	機関数	教師数	学習者数
4	15	725	6	19	970	2	22	240	5	32	418	11	88	2,353

（注）2024年度日本語教育機関調査は、2024年9月～12月に国際交流基金（JF）が実施した調査です。また、調査対象となった機関の中から、回答のあった機関の結果を取りまとめたものです。そのため、当ページの文中の数値とは異なる場合があります。

[「海外日本語教育機関調査」のページへ](#)

2.日本語教育の実施状況

全体的状況

沿革

第二次世界大戦後の日本語教育は、1967年、ソフィア「聖クリメント・オフリドスキ」大学（以下、「ソフィア大学」）東洋言語文化センターに日本語夜間公開講座が開設されたことにより始まった。1981年～2022年、ソフィア大学にはJFより日本語専門家が派遣された。

高等教育機関においては、ソフィア大学古典及び現代言語文学部東アジア言語文化学科日本専攻（1990年）が設立されたのを皮切りに、ヴェリコ・タルノヴォ「聖キリルと聖メトディ」大学（以下、「ヴェリコ・タルノヴォ大学」）文献学部古典・東洋言語文化学科応用言語専攻（1993年）、スヴィシュトフ「ツェノフ」経済大学（1995年、現在は廃止）において日本語教育が開始された。また、ブラゴエフグラッド「ネオフィット・リルスキ」南西大学（2015年）、新ブルガリア大学（2019年）などでも日本語が教えられている。

中等教育機関においても、ソフィア「ウィリアム・グラッドストーン」第18総合学校（1992年）、ルセ「ヴ

「Prof. ヴァシル・レフスキー」総合学校（2005年）等で日本語が専攻できるようになった。その後、ソフィア「Prof. ヴァシル・ズラタルスキー」第138総合学校（2012年）でも正規課程として日本語教育が導入された他、「ルイ・パストゥール」第40学校（2014年）でも日本語の授業が選択科目の一つとなっている。また2020年代に入ってから、黒海沿岸地域やプロヴディフ市（2025年）、プレヴェン市（2024年）等地方都市においても、日本語教育の導入例が複数ある。

学校教育以外では、「聖キリル・メトディ国際基金」の日本語講座、アゴラソフィア等民間の日本語学校等で日本語教育が行われている。

背景

1989年の東欧革命以前から日本の映画がテレビで放映されていたこともあり、日本の伝統文化やアジア的思想に対する関心は高かった。1990年以降、特に若者を中心に日本の経済やマンガ・アニメ・音楽などの新しい文化への関心、日本語・日本学というブルガリアでは比較的新しい学問分野への知的好奇心が日本語教育の普及に影響を与えていると考えられる。

特徴

高等教育機関や一般公開講座においては、日本文化、日本の政治経済、日本語に対する純粋な知的好奇心を学習動機として挙げる学習者が多い。学習を継続する段階で、観光ガイドや日本語を日常的に使用する仕事に就くことを希望するケースは少なくないが、最近ではアニメや漫画をきっかけとして日本語の学習を始める者が非常に多く、就職などへ結びつけるというよりはポップカルチャーを含む日本の文化を理解したいという目的を持つ学習者が多いようである。

最新動向

直近3年間で初等・中等教育の日本語教育機関数が増え（含む地方都市において日本語教育が初めて導入された複数の例）、それに伴い学習者数が伸びている。また、学校教育以外の機関・教師・学習者数についても大幅な増加となっている。他方、特に新規導入機関において、日本語教育をいかに定着させるかという課題がある。

教育段階別の状況

初等教育

（下記【中等教育】を参照のこと）

中等教育

● ソフィア「ウィリアム・グラットストーン」第18総合学校日本語学科

（日本語教育開始年：1992年）

ブルガリアで日本語教育を正規に取り入れた最初の初等・中等教育機関。1992年に日本語教育が始まったときは、日本の中学2年生にあたる8年生から高校3年生相当の12年生までの中等教育のみであったが、2005～2006年度より初等教育でも日本語が始まり、現在は1年生から12年生までの全学年で日本語教育が行われている。2025～2026年度現在、教師数は5名、学習者数は493名。学習者数はブルガリアの日本語教育機関の中で最も多い。

- **ルセ「ヴァシル・レフスキー」学校**

(日本語教育開始年：2006年)

1853年に開校したブルガリアで最大級の初等・中等教育機関で、ドナウ川沿いの主要地方都市ルセ市にある。上記ソフィア第18総合学校をモデルに2005～2006年度から日本語教育が導入されており、1～7年生までは選択必修、8～12年生は主専攻として、文化理解、異文化体験を目的に日本語と日本文化が教えられている。2025～2026年度現在、日本語教師数は3名、学習者数は394名で、そのうち129名が主専攻として、265名が選択科目として日本語を学んでいる。

- **ソフィア「Prof.ヴァシル・ズラタルスキー」第138学校**

(日本語教育開始年：2012年)

2009年に同校に「平山郁夫センター」が開設されたことを受け、2012年から日本語教育を開始した。8年生から12年生までが日本語を勉強している。授業は日本語(文法、語彙、漢字、会話、作文、聴解など)が中心だが、文化にも触れており、選択科目として現代日本文化も学習できる。2018～2019年度から上級学年の選択科目として読解、ディスカッションが提供されているほか(題材は、日本文化・習慣・社会に関する文章や短編小説)、会話や翻訳に関する授業等も行われている。2025～2026年度現在、教師は現地教師が3名。学習者数は131名。

- **ソフィア「ヴィクトル・ユーゴー」第81学校**

(日本語教育開始年：2024年)

2024～2025年度より、安全保障を専攻する生徒が第一外国語として日本語、第二外国語として英語を学習している。8年生では日本語を週12時限集中的に学び、さらに週2時限の選択授業が行われており、9年生では日本語を週6時限学習する。学習者数は53名。日本語教師数は3名(いずれも英語教員を兼務)。

- **ソフィア「エリサベタ・バグリアナ」第51学校**

(日本語教育開始年：2024年)

ソフィア大学の学生が大学の教育実習科目の活動として、8年生を対象に日本語・日本文化に関する授業を行っている。日本語学習者数は41名。2026-2027年度以降、日本語が正規科目として導入され、ドイツ語に代わる第二外国語として位置づけられる予定。クラブ活動として「よさこい」に取り組んでおり、様々な行事にて演舞を披露している。

- **ソフィア「ルイ・パストゥール」第40学校**

(日本語教育開始年：2014年)

2014年に日本語教育を開始した。ソフィア大学の学生が大学の教育実習科目の活動として、日本語・日本文化・ゲーム・歌などの授業を行っている。教材はインターネットリソースからの自作のものや、JFのEラーニングのサイトからのものを利用している。2025～2026年度現在、日本語の授業が行われているのは2年生と3年生で、日本語学習者数は約80名。

- **ソフィア「オマイニチェ」第95幼稚園**

(日本語教育開始年：2014年)

ソフィア大学の学生が大学の教育実習科目の活動として、6～7歳の未就学児を対象に週1回40分程度、日本

語・日本文化に関する授業を行っている。

- **ヴァルナ州ツォネヴォ村「フリスト・ボテフ」学校**

(日本語教育開始年：2022年)

2022年に日本語教育を開始した。3年生及び5年生を対象に、日本語・日本文化に関する授業が、当初は課外活動の一環として、その後は選択科目として、週1回2時限程度実施されている。生徒会が日本語教育の導入を希望し、同校校長がそれを受け入れたことがきっかけ。2025～2026年度現在、教師は現地教師が1名（「絆」語学学校の教員）。学習者数は32名。

- **プロヴディフ「聖クリメント・オフリドスキ」学校**

(日本語教育開始年：2025年)

1～5年生及び8年生を対象に、日本語・日本文化に関する授業が選択科目として、週1時限実施されている。2025～2026年度現在、教師は現地教師が1名。学習者数は150名。同校は毎週土曜日、市内児童を対象とした無料の日本語講座を提供している。

- **ロヴェチ「トドル・キルコフ」学校**

(日本語教育開始年：2022年。※2023年度、2024年度は中断していた)

一時休止を経て、2025年に再開。1～4年生及び5～7年生の2つのグループを対象に、日本語・日本文化に関する授業が課外活動の一環として、週1回2時限実施されている。2025～2026年度現在、教師は現地教師が1名。学習者数は25名。

- **プレヴェン「ヴァレリ・ペトロフ」学校**

(日本語教育開始年：2024年)

2年生及び3年生を対象に、日本語・日本文化に関する授業が課外活動の一環として、週1回1時限実施されている。2025～2026年度現在、教師は現地教師が1名（英語教員を兼務）。学習者数は25名。

高等教育

- **ソフィア「聖クリメント・オフリドスキ」大学古典及び現代言語文学部日本学科**

(日本語教育開始年：1990年)

日本学主専攻。日本語の授業以外に日本学、日本語学（入門、文字論、音声論、語彙論、形態論、統語論）、日本文学（入門、古典、近代、現代）、文語（中世資料）、言語学（入門、社会言語学）、翻訳論・翻訳実践、日本史（中世、近代、現代）、日本文化（宗教、言語、現代文化）、日本国家・政治論、日本民俗学などの授業も行われている。また、同修士課程には、「日本語と日本文化」及び「日本の社会と文化」の2つのプログラムがあり、日本語、日本文化、芸能・演劇、社会・経済、神道、現代日本研究、禅、建築、民俗誌などについての講義がある。前者は1年、後者は2年で、修士論文の審査が行われる。同博士課程には、現在2名が在籍。

2026年現在、日本学主専攻は学部1年36人、2年28人、3年29人、4年26人（合計119人）よりなる。また、同学科の教員陣には9名の常勤講師、3名の客員講師等が含まれ、学士、修士、博士の各課程で教鞭をとる。

同大学ブルガス分校において、2025～2026年度からは日本語を含む外国語教授法を学ぶための学士課程が設置された。現在、教師は2名（含む現地教師1名）。学習者数は13名。

● **ソフィア「聖クリメント・オフリドスキ」大学古典及び現代言語文学部東アジア言語文化学科東・南・東南アジア専攻日本専門モジュール**

(日本語教育開始年：2013年)

東・南・東南アジアを主に社会的・文化人類学的視点から研究することを目的とした専攻。日本専門モジュールは学部2年10人、3年15人、4年8人、合計33人(2025～2026年現在)よりなる。学部1年時の半年間の教養課程において、必修科目として政治学基礎、マクロ・ミクロ経済学基礎、アジア地域の宗教及び思想基礎、経済史、東南アジアと南アジアの経済モデル、インドネシア語基礎を学習後、学部1年後期より専門言語を選択して研究を進める。選択可能な必修言語には、日本語、中国語、韓国語があり、これらのうちいずれかを必修したうえで、3年時より第2選択自由言語としてベトナム語、インド語の受講も可能である。日本専門モジュールは学部1年後期より専門言語を日本語とした学生により構成される。日本専門モジュールの到達目標及び実際の達成度は2年次でおおよそN5、3年次でN4、卒業時はN3である。修士課程は、社会的・文化人類学的視点からの研究を軸とする1年間のコースと、歴史と現代政治の研究を軸とした1年半のコースがある。

● **ヴェリコ・タルノヴォ大学文献学部古典・東洋言語文化学科 応用言語専攻**

(日本語教育開始年：1993年)

日本語は第二外国語の一つ(英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語の中から、受験言語であった言語が必修となり、さらに、受験言語ではない言語の中から第二外国語を選択。学習時間は後者の方が多くなっている)。通訳・翻訳者の養成を目的とし、日本語の授業以外に日本文学、歴史・文化、翻訳・通訳、構文論・形態論などの授業も行われている。2004～2005年度にECTS(European Credits Transfer System)が導入されて以降、日本語科目の学習時間数が大幅に削減された。2025～2026年度の時点で学習者数は約20名。

● **ヴェリコ・タルノヴォ大学文献学部古典・東洋言語文化学科 応用言語専攻(英語・第二外国語とIT)**

(日本語教育開始年：2016年)

2016～2017年度からは応用言語専攻に英語・第二外国語とIT(Information Technology and Communication)専門が設置された。2025～2026年度の時点では19名が在籍している。授業内容は上記の応用言語専攻に準じているが、翻訳・通訳の授業は少ない。

● **ヴェリコ・タルノヴォ「聖キリルと聖メトディ」大学文献学部古典・東洋言語文化学科 応用言語専攻(国際観光、国際関係、ビジネス・コミュニケーション)**

(日本語教育開始年：2019年)

2019～2020年度からは応用言語専攻に国際観光、国際関係、ビジネス・コミュニケーションの専門が設置された。日本語は第二外国語に含まれる。日本語の選択者は2025～2026年の時点では合計25名が在籍。授業内容は上記の応用言語専攻に準じているが、翻訳・通訳の授業は少ない。

● **ヴェリコ・タルノヴォ大学文献学部古典・東洋言語文化学科 外国語モジュール(日本語)**

(日本語教育開始年：2019年)

専攻を問わず、日本語、日本史・文化、構文論・形態論、文学を学習することができる。2025～2026年度は1名が在籍。

学校教育以外

● **ソフィア大学東洋言語文化センター「日本語・日本文化」講座(ノンディグリー・プログラム)**

(日本語教育開始年：1967年。※2006年度、2016年度、2017年度は中断していた)

ブルガリアで最初に開設された日本語教育機関であるソフィア大学夜間公開講座の後身としての一般公開講座。大学生以上の学習者を対象とした2年間のノンディグリー・プログラムであり、既定の科目を履修し、合格すれば修了証(ディプロマ)が授与される。2018～2019年度以降、「日本語」、「日本文化－歴史・伝統・現代－」、「日本におけるビジネスと社会の成功モデル」などの講義が行われている。2025～2026年度現在、週2回各4時限授業が行われている。

- **ヴァルナ自由大学**一般講座として日本語の授業がICEA(International Cross-cultural Exchange Association)から派遣された日本人教師によって行われている。対象者は大学生、社会人、同大学教員等だが、年によっては卒業単位になっている。

- **聖キリル・メトディ国際基金**

(日本語教育開始年：2009年)

首都ソフィアに本部を置く1982年に設立された国際的な非政府・非営利組織。在ブルガリア大使館と共催で、1991年以来日本政府(文部科学省)奨学金留学生選考試験の運営、1998年以来日本語弁論大会の実施を行っている。1998年から2019年までは日本語能力試験の実施機関でもあった。N5～N2レベルの日本語コースを開講しており、2024年から2025年までで合計140人が同コースを受講した。教師数は4名。裏千家淡交会ブルガリア支部、東海大学同窓会ブルガリア支部、生け花「かげつ」クラブなどの活動も支援している。

- **アゴラソフィア**

民間の日本語学校。2009年に日本語教育を開始。学習者数は約100名。児童向けから上級者までのコースを設置している。教員数は6名(常勤教師5名、非常勤1名)。

- **「絆」ヴァルナ協会**

民間の設立団体。2009年に日本語教育を開始。学習者数は約32名。初級から中級までのコースを設置している。教員数は2名。

- **「悟」日本語学校**

民間の設立団体。2021年に日本語教育を開始。学習者数は約40名。初級から中級までのコースを設置している。教員数は1名。

- **日本文化センター「こころ」**

民間の設立団体。2022年に日本語教育を開始。子供から大人を対象に、集団及び個別授業が実施されている。学習者数は85名。教員数は3名。

3.教育制度と外国語教育

教育制度

教育制度

4-4-4制。

初等教育(4年)、前期中等教育(4年)、後期中等教育(4年)に分類される。義務教育は、5歳からの就学前教育を含め、16歳(10年生)まで。

教育行政

初等・中等・高等教育機関のほとんどが教育・科学省の管轄下にある。

言語事情

国民の大部分はブルガリア語を話す。トルコ系住民（総人口の約10%）の間ではトルコ語が話されている。ロマ系住民の間では家庭内でロマ語が話されているが、公用語としてはブルガリア語しか使われていない。

外国語教育

第一外国語としては英語を学ぶ者が最も多く、その他の外国語ではフランス語、ドイツ語、ロシア語を学習する者が多い。第一外国語は初等教育の段階から教えられる。後期中等教育の段階で第二外国語も教えられるようになる。

外国語の中での日本語の人気

学生のみならず一般市民の間でも日本語・日本文化に対する関心は高い。しかし、日本語はたいへん難しい外国語であるという評価が一般的であることもあり、ヨーロッパ言語と比べると学習者数は少ない。

大学入試での日本語の扱い

大学入試で受験科目として日本語は扱われていないが、2020年よりソフィア大学日本学科入試時の有効資格として日本語能力試験が認定されることとなった

4. 学習環境

教材

初等教育

低学年時は、ひらがな・カタカナ教材、自作教材、『Japanese for Young People』AJALT（講談社 USA）シリーズなどが使用されている。

中等教育

主教材として使用されているのは『みんなの日本語』スリーエーネットワーク（スリーエーネットワーク）シリーズ、『Japanese For Young People』（前出）シリーズ、『まるごと 日本のことばと文化』国際交流基金（三修社）シリーズなどである。「JF にほんご e ラーニング みなと」（国際交流基金関西国際センター）を利用している機関もある。

高等教育

初級段階の主教材としては『みんなの日本語 初級Ⅰ、Ⅱ』（前出）が多く使用されている。中級段階以上では、『中級へ行こう』平井悦子ほか（スリーエーネットワーク）、『中級を学ぼう 中級前期』平井悦子ほか（スリー

イーネットワーク)、『日本語中級 J501』土岐哲ほか(スリーイーネットワーク)、『みんなの日本語 中級Ⅰ、Ⅱ』スリーイーネットワーク(スリーイーネットワーク)、『上級へのとびら』岡まゆみほか(くろしお出版)、『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』鎌田修ほかや、『An integrated approach to Intermediate Japanese』三浦昭ほか(ジャパントイズ)、『毎日の聞きとり』宮城幸枝ほか(凡人社)シリーズなどが使用されている。

学校教育以外

『みんなの日本語』(前出)シリーズ、『まるごと 日本のことばと文化』(前出)シリーズなどが使用されている。

IT・視聴覚機材

2020年3月以降、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、多くの機関でオンライン授業の導入が進められた。

5. 教師

資格要件

初等教育

機関により異なる。

中等教育

機関により異なる。

高等教育

明確な資格はないが、修士号取得を条件としているところもある。

学校教育以外

明確な資格はない。

日本語教師養成機関(プログラム)

ソフィア大学とヴェリコ・タルノヴォ大学がその役割を果たしている。

日本語のネイティブ教師(日本人教師)の雇用状況とその役割

1989年の独裁政権崩壊後、1992年に日本とブルガリアの政府間で青年海外協力隊派遣取極が交わされると、1993年から協力隊の日本語教師が派遣され、地方都市でも日本語教育が行われるようになった。

2007年にブルガリアがEUに加盟すると協力隊派遣は打ち切られることとなったが、それと入れ替わるように外務省の「日本文化発信プログラム」が2008年度に始まり、日本語と日本文化発信を目的としたボランティ

ア（以下、文化発信ボランティア）が2009年から2011年まで派遣された。

文化発信ボランティア撤退後、EU加盟に伴う長期査証取得手続の複雑化と審査の厳格化により日本人教師が継続して勤務するための法的地位の獲得が難しくなっており、多くの機関で日本人教師は慢性的に不足している。

日本人教師に期待される役割として、初等教育では、異文化理解の要素が大きいため、折り紙、習字、日本の唱歌などを通じて生徒に日本文化を伝えることが期待されている。中等教育では、一般にブルガリア人教師が文法解説を行い、日本人教師は会話・発音等の指導にあたっている。高等教育機関等では、ブルガリア人教師とチームティーチングによって初級から上級までの日本語の授業を担当することが多い。その他の活動として、能力試験・留学試験の補習授業、弁論大会出場者への指導、文化祭の準備に関わることなどがある。

教師研修

研修という形では行われていないが、2023年以降、毎年1回、JFブダペスト日本文化センター派遣の日本語専門家による勉強会が実施されている。その他には、JF訪日研修、JFブダペスト日本文化センターが実施する教師研修（対面・オンライン）がある。

現職教師研修プログラム（一覧）

特になし。

6.教師会

日本語教育関係のネットワークの状況

2002年11月、ブルガリア日本語教師会が設立。2003年7月に非営利団体法人として正式に登録、2007年3月に『『キリル・ラデフ』ブルガリア日本語教師会』に改称された。しかし、その後、2012年1月に解散した。

2016年4月以降はSNSのグループで教師間の連携を図っている。

最新動向

なし

[教師会・学会一覧へ](#)

7.日本語教師派遣情報

国際交流基金からの派遣

JFからの派遣は行われていない。

その他からの派遣

ICEA (International Cross-cultural Exchange Association) が、2002年よりブルガリアへの日本語教師派遣

を開始し、これまでソフィア第 31 総合学校、ブルガス「聖キリル・メトディ」総合学校、スヴォゲ「オテツ・パイシ」総合学校、ブルガス「ブラディア・ミラデノヴァ」総合学校、シュメン「コンスタンティン・プレ斯拉フスキー」大学、ヴァルナ「ニコラ・バプツァロフ」海軍士官学校などへの派遣を行い、課外活動的に日本語の授業を実施していた。2025~2026 年度は、ソフィア大学、ヴェリコ・タルノヴォ大学、ヴァルナ自由大学等に派遣されている。

8. シラバス・ガイドライン

初等・中等教育レベルに関しては、ブルガリア文部科学省によりカリキュラムが定められている。日本語科目における指導内容についても基準が示されている。

[シラバス・ガイドライン一覧へ](#)

9. 評価・試験

2025 年度募集文部科学省国費外国人留学生の採用実績：研究留学生 3 名、日本語・日本文化研究留学生 9 名（含：大学推薦）、学部留学生 1 名。

1998 年より日本語能力試験を実施。これはブルガリアで唯一の全国統一日本語試験となっている。その他 1995 年より当地の大使館と聖キリル・メトディ国際基金により日本語弁論大会も実施されている。

10. 日本語教育略史

1967 年	ソフィア大学東洋言語文化センターにて日本語夜間講座開設
1981 年	JF より日本語教育専門家派遣開始
1990 年	ソフィア大学古典及び現代言語文学部東アジア言語文化学科日本語専攻設立
1992 年	ソフィア「ウィリアム・グラッドストーン」第 18 総合学校日本語学科設立
1993 年	JICA 青年海外協力隊の日本語教師派遣開始 ヴェリコ・タルノヴォ大学文献学部古典・東洋言語文化学科応用言語専攻にて日本語教育開始
1995 年	スヴィシュトフ「ツェノフ」経済大学選択科目教育課外国語センターにて日本語教育開始（現在は行われていない）
2002 年	ブルガリア日本語教師会、設立
2003 年	ブルガリア日本語教師会、非営利団体法人として正式登録

2006年 9月	「ヘンリー・フォード」交通・エネルギー学校にて日本語が専攻できるようになる（現在は行われていない） ルセ「ヴァシル・レフスキー」総合学校にて日本語が専攻できるようになる
2007年	ブルガリア日本語教師会、『『キリル・ラデフ』ブルガリア日本語教師会』に改称
2009年	JICA 青年海外協力隊の日本語教師派遣終了 ソフィア第 18 総合学校日本語一般市民講座にて日本語教育開始（現在は行われていない） 「アゴラソフィア」日本語学校設立
2012年	「キリル・ラデフ」ブルガリア日本語教師会、解散 ソフィア「Prof.ヴァシル・ズラタルスキー」第 138 総合学校で日本語が専攻できるようになる
2012年	ヴェリコ・タルノヴォ大学文献学部古典・東洋言語文化学科に「日本語・ブルガリア語」専攻が増設される （現在は活動を行っていない）
2014年	ソフィア「ルイ・パストゥール」第 40 学校にて日本語教育が始まる
2014年	ソフィア「オマイニチェ」第 95 幼稚園で日本語・日本文化を教え始める
2015年	ブラゴエフグラッド「ネオフィット・リルスキ」南西大学言語学部で一般講座日本語開始
2016年	ヴェリコ・タルノヴォ大学文献学部古典・東洋言語文化学科応用言語専攻に「英語・第二外国語と IT」専門が設置される
2018年	ソフィア大学古典及び現代言語文学部「東アジア言語文化学科日本専攻」が同学部「日本学科」として学科独立する
2019年	ヴェリコ・タルノヴォ大学文献学部古典・東洋言語文化学科応用言語専攻に、「国際観光、国際関係、ビジネス・コミュニケーション」が増設される ヴェリコ・タルノヴォ大学文献学部古典・東洋言語文化学科 外国語モジュール（日本語）が設置される
2021年	ブルガス市コンピュータプログラミング及びイノベーション専門

学校にて日本語教育が始まる

「悟」日本語学校設立

日本文化センター「こころ」設立

ソフィア大学日本学科の修士課程に、「日本の社会と文化」プログラムが増設される。

2022 年

ヴァルナ市所在の3つの初等中等教育機関で日本語教育が始まる

2024 年

ソフィア市所在の2つの中等教育機関にて日本語教育が始まる

プレヴェン「ヴァレリ・ペトロフ」学校で日本語・日本文化を教え始める

2025 年

プロヴディフ「聖クリメント・オフリドスキ」学校で日本語・日本文化を教え始める

ソフィア大学ブルガス分校において、日本語を含む外国語教授法を学ぶための学士課程が設置される

情報更新についてのお願い

この国の日本語教育に関する情報がありましたらお知らせくださるようお願いいたします。

なお、内容の確認のため、こちらからご連絡する場合があります。

Eメール：kunibetsu@jpf.go.jp

(メールを送る際は、全角@マークを半角@マークに変更してください)